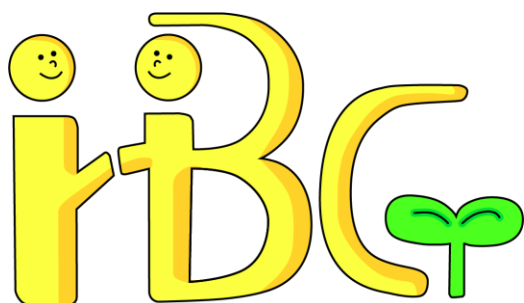


HBG 対人援助研究センター一年報

令和6年度

第2巻



広島文化学園大学・短期大学
HBG 対人援助研究センター

目次

1. はじめに
2. 令和6年度研究成果発表会「地域を活性化する対人援助の活動と研究」
3. 第1回研究交流会の報告書
4. 第2回研究交流会の報告書
5. 全学共通の研究テーマ「学生支援の現状と課題に関する研究計画」
6. 全学共通の研究テーマ「メタバースの基礎研究から応用への展望」
7. 看護総合研究センターの活動報告
8. 子ども・子育て支援研究センターの活動報告
9. スポーツ健康福祉研究センターの活動報告
10. おわりに

1. はじめに

広島文化学園大学・短期大学 学長

HBG 対人援助研究センター本部長

坂越 正樹

HBG 対人援助研究センター年報令和6年度版が完成しましたので、ここに公表します。広島文化学園大学では、平成28年度に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の選定を受け、以後、広島文化学園 HBG 対人援助研究センターを核として、阿賀キャンパス、長束キャンパス、坂キャンパスとの連携を図りながら事業を推進してきました。研究ブランディング事業においては、地域共生のための対人援助システムを構築し、対人援助プログラム及びサポーター養成プログラムを開発しました。本年度も、全学センターとしての HBG 対人援助研究センターと、看護総合研究センター（阿賀キャンパス）、子ども・子育て支援研究センター（長束キャンパス）、スポーツ健康福祉研究センター（坂キャンパス）の3つの研究センターの連携・協力によって本学ブランドである「対人援助」の研究を推進してきました。

活動の概要については、令和7年2月28日に開催されたオンライン研究成果報告会の資料をご覧いただければ幸いです。高齢者と学生の交流を通して「若い」を健康に生きるカフェ活動（阿賀）、「ぶんぶんひろば」での親子を招いた音楽会（長束）、障がいの有無にかかわらず楽しめるアダプテッド・スポーツ（坂）などの活動成果が報告されています。今年度はそれに加えて、HBG 対人援助研究センターとして全学共通の研究テーマを設定して取り組んだことが大きな特徴です。①学生支援の課題を踏まえた研究調査、②メタバースの大学での応用の2件です。学生支援に関してはコロナ禍以降大きく変化したとみられる大学生の学修と生活の意識、「困り感」、援助希求能力などについて悉皆調査を行うとともに、援助する側の教職員の意識や活動も調査分析の対象としました。この課題は今日の大学教育にとって重要な示唆を得られるものであり継続的に研究調査を進めていく予定です。メタバースについては、実習場面でのシミュレーションやサイバー空間授業への展開のほか、アバターによる学生支援ルームの開設、ピアサポートなど大きな可能性を示しています。

そのほか、科学研究費補助金獲得のための相談窓口を設置し、多くの関心ある教員が参加しました。また、学部や学科を越えた研究交流の場としてオンラインで多様な教員の研究を紹介する講演会を開催しました。これらの取り組みにより、異分野の同僚教員の研究成果が共有されるとともに、「対人援助」を鍵概念とした教職員の研究マインドが醸成されています。

最後に、HBG 対人援助研究センター長として開設以来活動を牽引していただいた山崎晃教授への感謝の言葉を申し上げます。山崎教授は令和6年3月末をもって10年間勤務された広島文化学園大学を定年退職され名誉教授とされます。山崎教授は冒頭に紹介した私立大学研究ブランディング事業の申請から事業展開、その後の継続的活動まで文字通り中心となってお尽力いただきました。このページをお借りして感謝の意を表したいと思います。

本学はHBG 対人援助研究センターの研究活動を通して、今後もすべての人々が健康に暮らす共生社会の実現のため、関係自治体と連携して、地域連携・地域貢献に一層尽力してまいります。

関係の皆さまのご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2. 令和6年度研究成果発表会「地域を活性化する対人援助の活動と研究」

対人援助研究センター

広島文化学園の3キャンパスの対人援助に係る研究や活動の成果を発表し、対人援助活動・研究の情報を共有し、地域との連携強化を図り、次年度以降の活動に活かし、今後の対人援助研究センター活動を強化し、学生の学習活動、学習支援を積極的に進めるため、令和6年度研究成果発表会「地域を活性化する対人援助の活動と研究」を開催した。本発表会はzoomを活用したweb形式で令和7年2月28日（金）14時00分～15時00分に開催された。本発表会には教職員30名が参加した。

まず、開催に際して、森元理事長から挨拶があり、ブランディング事業からの対人援助の取り組みからブランディング以降の取り組みや今後の活動方針について説明があった。

次に、3センターの活動・取り組みの発表を行った。看護総合研究センターでは看護学科の棚崎教授から『「世代間交流」 老いを生きる人と看護学生をつなぐきんさいカフェ具』をテーマに発表を行い、呉市で実施されているきんさいカフェの活動やその効果について説明が行われた。子ども・子育て支援研究センターでは、音楽学科の高橋千絵准教授が『ぶんぶんひろばを活用した音楽会開催によ

広島文化学園
HBG対人援助研究センター
令和6年度成果発表会

地域を活性化する 対人援助の活動と研究

開催日 2/28 2025 Fri

時間 2月28日（金）14:00～15:00 開場 13:30

会場 Zoomウェビナー配信
URL: <https://x.gd/X44gs>
Pass: 167878

参加費 無料

発表会について
広島文化学園の3キャンパスの対人援助に係る研究や活動の成果を発表し、対人援助活動・研究の情報を共有し、地域との連携強化を図り、次年度以降の活動に活かしていきます。
対人援助研究センター活動を強化し、学生の学習活動、学習支援を積極的に進めるために、共通の研究テーマに関する中間発表を行います。

内容

- 1)三つのセンター活動・取組
 - ①『「世代間交流」老いを生きる人と看護学生をつなぐきんさいカフェ具』
 - ②『ぶんぶんひろばを活用した音楽会開催による学生の学び』
 - ③『誰でも楽しめるアダプテッド・スポーツで広がる輪』
- 2)全学共通の研究テーマ
 - ①『学生支援の課題をふまえた今後の研究展開』
 - ②『メタバースの大学での応用』
- 3)質疑応答

HBG対人援助研究センター
〒731-0136
広島県広島市安佐南区長東西3-5-1
TEL. 082-239-5171

広島文化学園大学・短期大学HP
<https://www.hbg.ac.jp/>

広島文化学園大学 検索

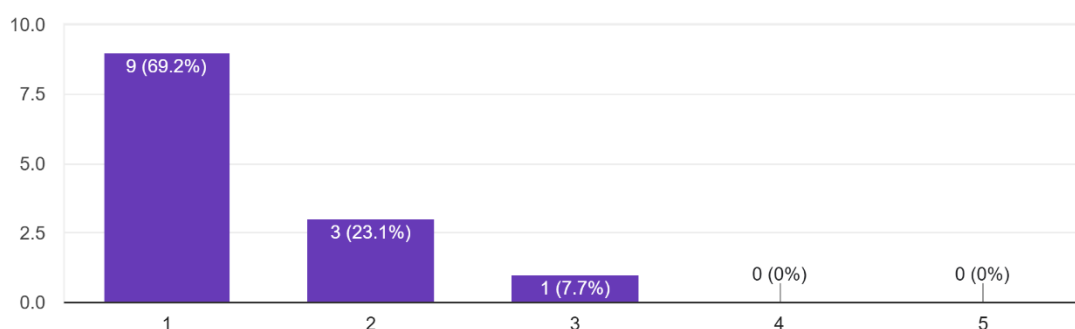
る学生の学び』をテーマに発表し、音楽会開催の内容とそれによって得られた教育効果を紹介した。スポーツ健康福祉研究センターでは、スポーツ健康福祉学科の升本准教授から『誰でも楽しめるアダプテッド・スポーツで広がる輪』をテーマに、ブラインドサッカー教室とそれによる視覚障害者観の変化について紹介した。

次に、全学共通の研究テーマについての発表があり、『学生支援の課題をふまえた今後の研究展開』をテーマに棚崎教授が発表された。学内で行ったアンケートの結果や今後の学生支援の方策について説明が行われた。『メタバースの大学での応用』をテーマに升本准教授から発表があり、学内でのメタバースの認知度や今後の大学での活用の展望について説明があった。

全ての発表後、質疑応答を行ったが、今後、森元理事長から地方自治体との連携を強化するよう指摘があった。最後に、坂越学長からの挨拶が行われ、本発表会を開催することで、教員間で研究の知識が共有できたことなどに触れた。

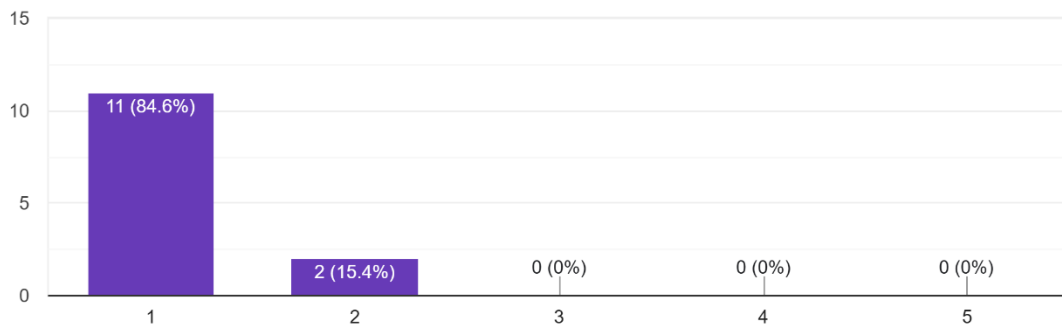
以下に、本発表会で実施したアンケートの結果について記載する。

(1) 『「世代間交流」 老いを生きる人と看護学生をつなぐきんさいカフェ』の発表について



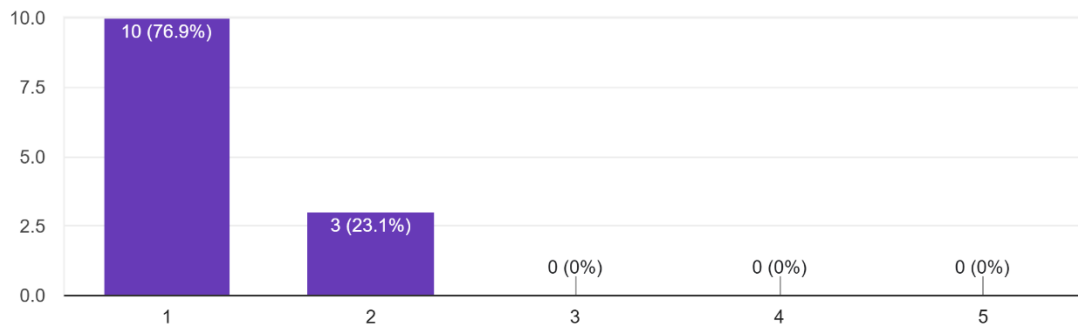
- ・ 取組状況をわかりやすくご説明していただいた。
- ・ 丁寧に説明してくださったため。PPTも見やすかった。
- ・ 資料が適切であった。
- ・ 知ってはいたものの、きちんと説明を聞いたのは初めてでした。目的や内容がよく分かりました。

(2) 『ぶんぶんひろばを活用した音楽会開催による学生の学び』について



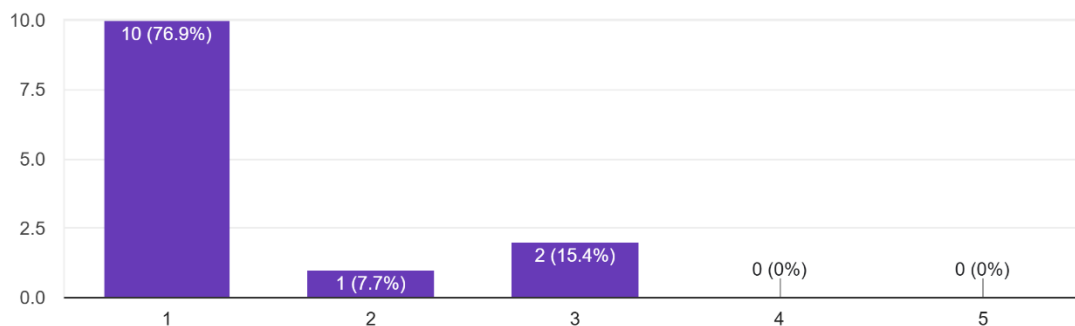
- ・わかりやすく説明していただきました。学生の体験が感想などから、学びが深まっていることがよくわかりました。
- ・学生の教育効果が理解できました。
- ・丁寧に説明してくださったため。PPT も見やすかった。
- ・段階を踏んで説明をしながら、学生に実際やらせてみることで、振り返ることで、学生の実行力が育つ様子がよくわかりました。

(3) 『誰でも楽しめるアダプテッド・スポーツで広がる輪』について



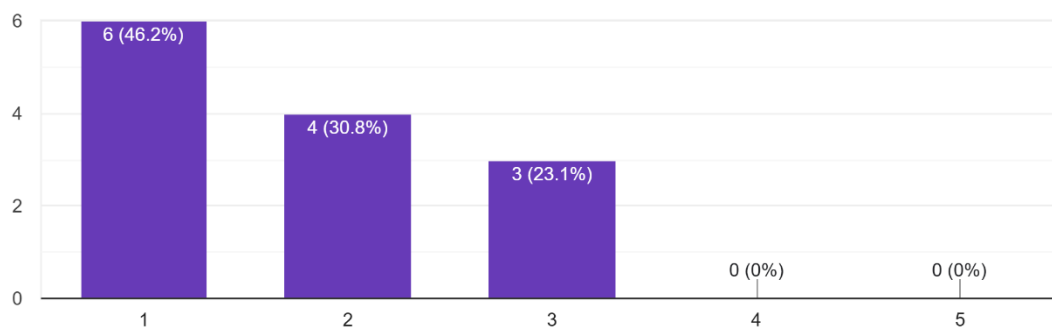
- ・わかりやすい発表だったと思います。様々な取組があることを知りました。
- ・小学生の調査や結果の詳細を教えてくださいました。
- ・丁寧に説明してくださったため。PPT も見やすかった。
- ・資料が適切であった。
- ・障害のある方へのスポーツ指導だけでなく、健常者の認識や理解を広げるための体験学習としても意義があることがよくわかりました。

(4) 『学生支援の課題をふまえた今後の研究展開』について



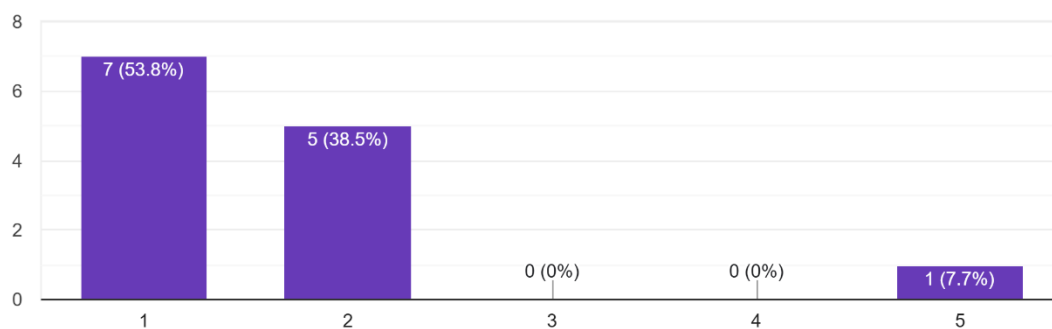
- 研究の現状について理解できました。
- 進捗状況と今後の予定がわかりました。
- どこの大学でも考えなければならないことだから。
- 資料が適切であった。

(5) 『メタバースの大学での応用』について



- メタバースの考え方は少しわかりました。詳しくないので、半分くらいの理解と思います。
- 学生の実態がアンケート調査結果により、改めて理解できた
- 大学での応用についてご教授いただきました。
- 方向性がまだ曖昧と感じた。
- 若い学生世代にとっても新しいツールであり、未知の部分も大きいですが、新しい技術を正しく知って取り入れ方を考える姿勢は大事だなと感じました。

(6) 研究成果発表会全体について



- 各学科で学生の教育のために様々な取組がなされていることがよくわかりました。参加させていただき、ありがとうございました。
- 各取組みについては、大変分かりやすいご発表でした。ありがとうございました。
- ご発表いただき学園の様々な取組みを知ることができました。
- 時間が短いということもあってか、研究成果という意味ではどうだったのかよく分からなかった。
- これまでの成果発表会には勤務時間の都合で参加できなかったのですが、今回参加できて良かったです。大学全体の取組みの状況がわかりました。ありがとうございました。

3. 第1回研究交流会

スポーツ健康福祉研究センター

対人援助研究センターでは 様々な研究分野で研究交流を図り、知識を共有することは研究の促進することともに学部学科間の研究交流を図るため、google meetを活用したweb形式で令和6年12月13日（金）12時30分～13時00分に第2回研究交流会を開催した。講師は松田 広教授（スポーツ健康福祉学科）であり、『高等学校「体育理論」領域における授業作成の試みに関する研究』をテーマとして発表を行った。対象者は教員、事務職員、大学院生、学部生であり、16名が参加した。体育授業における課題や評価方法とその分析からどのような授業を作成していくことが重要かを説明された。教職関係の内容であったため、大学院生や学部生の参加も多く（大学院生2名、学部生5名、修了した院生1名）。

アンケートでは交流会の非常に理解できたが33%、役に立った44%と回答しており、約8割の参加者が研修の知識が理解できたと回答している。学部生も参加していたが、理解し易い内容であったと考えられる。

交流会の非常に役に立ったが22%、役に立った44%と回答しており、約6割の参加者が研修の知識が役に立ったと回答している。

本来は主に、教員同士の研究交流を目的として研究交流会を開催しているが、教職に関するテーマを設定することで学生と院生等にアプローチできたことは収穫であった。

令和6年度 研究交流会

様々な研究分野で研究交流を図り、知識を共有することは研究の促進につながると考えられます。学部学科間の研究交流を図るため、研究交流会を開催いたしますので、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

○日 時：令和6年12月13日（金）12:30～13:00

○テーマ：高等学校「体育理論」領域における授業作成の試みに関する研究

○演 者：スポーツ健康福祉学科 松田 広 教授

○対 象：教員、事務職員、大学院生・学部生

○会 場：google meetによる開催

○会場URL：<https://meet.google.com/kkr-dgpf-hyk>



会場URL(QRコード)

【講師プロフィール】松田 広（まつだ ひろし）

専門分野：スポーツ教育学・体育科教育学
早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 修士課程
<主な論文>

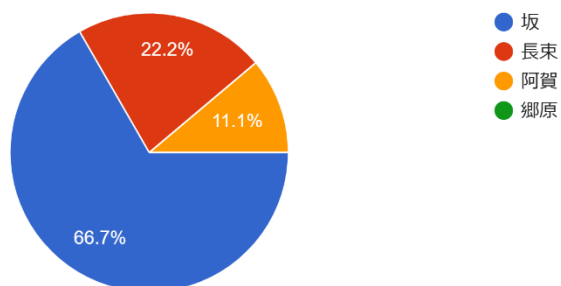
1. 松田広(2015)高等学校「体育理論」領域における授業作成の試みに関する研究-単元「トップアスリートの栄光と没落」の事例を基にして-
2. 松田広(2017)高等学校「体育理論」領域における授業作成の試みに関する研究-単元「ドーピングとスポーツ倫理」授業尺度の開発を通して-福山平成大学 福祉健康科学研究 12,12-18
3. 松田広(2018)高等学校における運動有能感に着目した普通科と体育・スポーツコースに関する一考察 福山平成大学 福祉健康科学研究13,93-105

主催：対人援助研究センター・スポーツ健康福祉研究センター

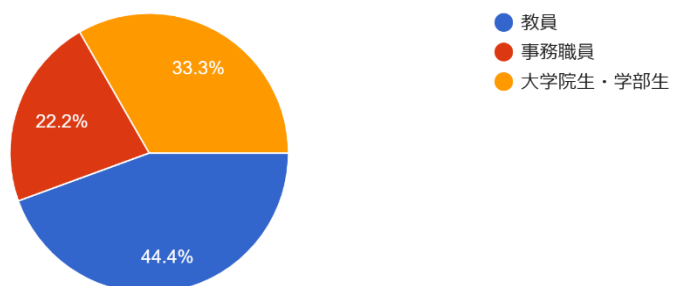
問い合わせ：masumoto@hbg.ac.jp



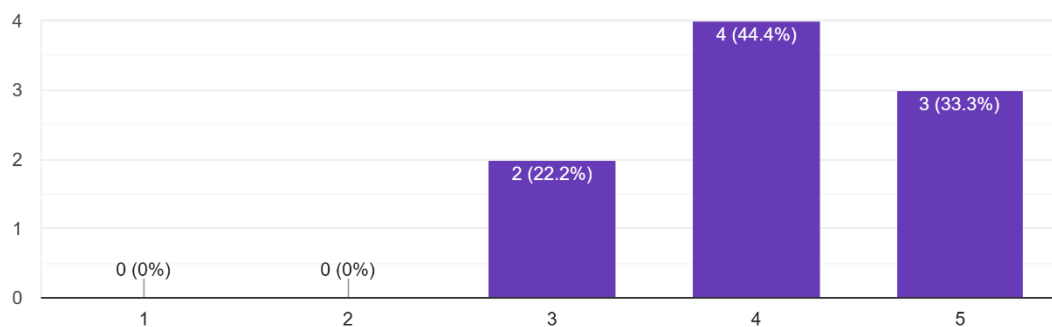
(1) 所属



(2) 教職員の区分



(3) 研究交流会の内容は理解できましたか。

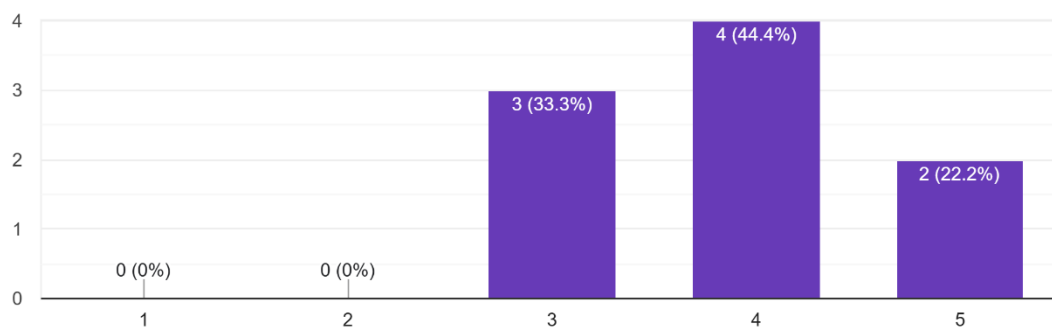


(4) 何が興味深かったり、印象に残りましたか。その内容と理由をお書きください。

- ・スライドもあり、詳しい説明で分かりやすく理解できました。
- ・時間は限られていたが理解しやすいと感じた。
- ・評価尺度や因子分析など、自分自身も研究で親しんでいる手法を使用されていたため
- ・課題・目的が明確であった。

- ・平易な言葉で説明していただけたため。

(5) 研究交流会の内容は、あなたのこれからの活動・行動に役に立ちそうですか。



(6) 質問 (5) の理由をお書きください。

- ・学生への支援に生かせると思いました。
- ・今後、教育実習に行くので聞いたことを活かしていきたいです。
- ・研究対象が異なるので、どちらとも言えない。
- ・実際にこのような取り組みをしていること自体知らなかったため今日参加させていただきよかった。
- ・自身の専門とは異なる方の研究を知ること、新しい研究のヒントを得ることができる
- ・「教育」という枠組みは同じなので。
- ・スライドの内容がとても分かりやすかった。
- ・聞いた話を己の技量に落とし込めるかどうか。

(7) 今回の研究交流会に出席して自身の研究活動等で改善できる内容があれば教えてください。

- ・学生支援の方法。
- ・現場を重視することの重要性を改めて痛感した。
- ・研究課題・目的をより明確にすること
- ・短い時間で研究を発表することの難しさを感じた
- ・内容と方法を別物と考えるという点は、目から鱗でした。

4. 第2回研究交流会

対人援助研究センター

対人援助研究センターでは 様々な研究分野で研究交流を図り、知識を共有することは研究の促進することともに学部学科間の研究交流を図るため、google meetを活用したweb形式で令和7年2月21日(金)12時30分~13時00分に第2回研究交流会を開催した。講師は学芸学部 子ども学科 藤金 倫徳 教授であり、「行動分析学の立場からの障害のある子どもの支援に関する研究」をテーマとして発表を行った。対象者は教員、事務職員、大学院生、学部生であり、16名が参加した。行動分析学からの専門的な視点から、障害のある子どもの行動、表情等を改善していくことで、成長を促進するような研究を紹介した。

アンケートを行った結果、非常に理解できたが27.3%、役に立った27.3%と回答していた。交流会の内容は非常に専門的内容であったが、動画等を活用し、理解し易くなるよう工夫されていた。

交流会の非常に役に立ったが22%、役に立った44%と回答しており、約6割の参加者が研修の知識が役に立ったと回答している。記述式アンケートでは学んだ知識を学生支援などに役立てたい等の意見もあった。

令和6年度 第2回 研究交流会

様々な研究分野で研究交流を図り、知識を共有することは研究の促進につながると考えられます。学部学科間の研究交流を図るため、研究交流会を開催いたしますので、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

○日 時：令和7年2月21日(金)12:30~13:00

○テ ー マ：行動分析学の立場からの障害のある子どもの支援に関する研究

○演 者：学芸学部 子ども学科 藤金 倫徳 教授

○対 象：教員、事務職員、大学院生・学部生

○会 場：zoomによる開催

○会場URL：[<クリック>](#)



QRコード

【講師プロフィール】藤金 倫徳 (ふじかね みちのり)

専門分野：知的障害児教育、応用行動分析学
横浜国立大学大学院教育学研究科障害児教育専攻 修士
<主な論文>

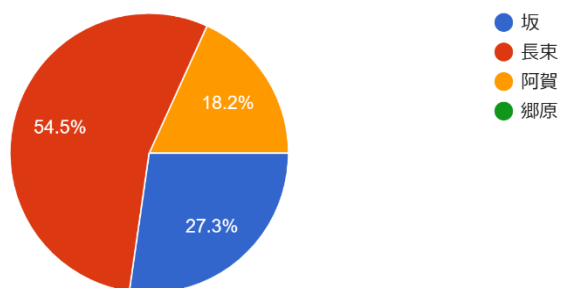
1. 藤金倫徳(1997)状況に適した要求言語使用の改善および促進に関する研究-刺激等価性の観点から-。特殊教育学研究, 35(3), 1-10.
2. 藤金倫徳(2002)「人工セルフモデリング」法による重度発達障害児の音声による要求言語の形成。特殊教育学研究, 40(1), 3-12.
3. 島村睦仁・藤金倫徳(2003)中度知的障害児の固執的な集合数報告行動の改善-固執行動改善のためのその行動自体の利用の効果-。特殊教育学研究, 41(2), 235-243.

主 催：対人援助研究センター・子ども子育て支援研究センター

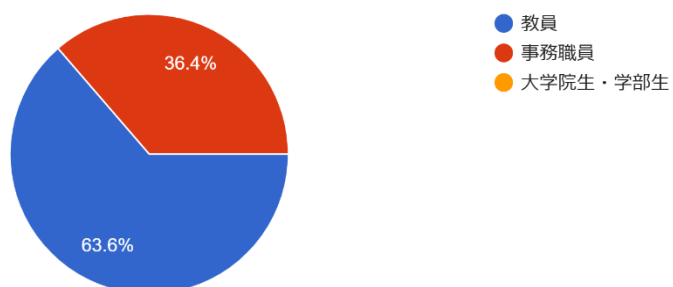
問い合わせ：a-yamazaki@hbg.ac.jp, masumoto@hbg.ac.jp



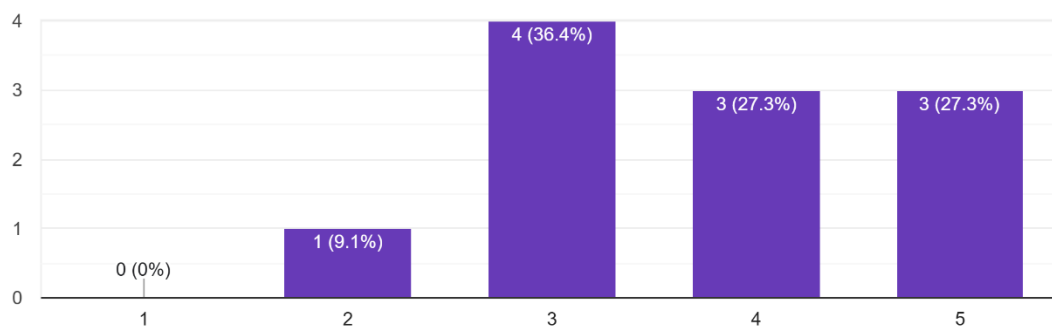
(1) 所属



(2) 教職員の区分



(3) 研究交流会の内容は理解できましたか。

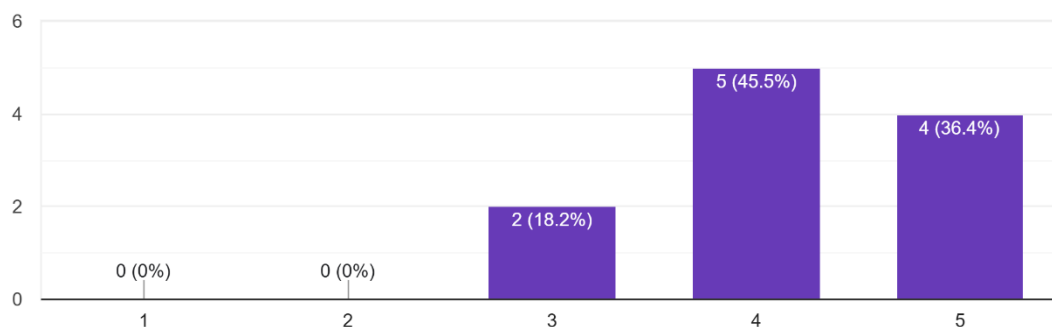


(4) 何が興味深かったり、印象に残りましたか。その内容と理由をお書きください。

- ・ 障害のある子どもの支援の視点が、学生支援につながるのではないかと思います。
- ・ 特別支援の研究・学修方法や参考図書を学びたいです。
- ・ 心ではなく環境。
- ・ 本学の学生支援にも有用なご研究であるため。

- ・ 普段接する機会のない分野だったので、興味深かった。仕事の中で役立てることができるといい。
- ・ 学生とのコミュニケーションに役立てたいと思います。
- ・ 授業等で役に立つ
- ・ 研究の視点が参考になる。
- ・ 動画から研究の内容がよく伝わってきた。

(5) 研究交流会の内容は、あなたのこれからの活動・行動に役に立ちそうですか。



(6) 質問 (5) の理由をお書きください。

- ・ 言葉の意味付けについて、深く考える機会となり研究理論を構築していく際に役立つ
- ・ 生きていくうえで、環境要因を整えることが重要というお話が印象深かった。学生に最適な環境を提供できるよう考えるようにしたい。
- ・ 学生をよく観察し、学生が何を求めているか察知して業務に活かしていこうと思います。
- ・ 概念等の具体化。
- ・ 心理学的視点の活用。
- ・ ビデオ撮影による観察と分析の仕方
- ・ 研究活動とは異なる回答になりますが、行動という行為が、死んでいる人には出来ない行為ということが印象的でした。障害のある子どもの支援だけでなく、他人の行動に変化を求める場合は、段階を経ること、自分も行動や対応を変える、などのことを実践することで、相手の行動にも変化が起こるのではないかと思います。
- ・ 配慮の必要な学生のどの行動に焦点をあてるか見極める力をつけなければと思った。また、賞賛は、強化因子になる事を再確認した。

(7) コメント・質問等があればご記入ください。

- ・ 貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

- 大変深い内容であったが、短時間でもっと丁寧に伺いたかった。何かの機会に再度お話を伺いたい。
- レジューメがあるとより講演内容を理解ができると思います。簡易的な内容でもよいので、レジューメの配布をご検討いただきたいです。
- 先生方が授業や学生の指導をされている中で、ご自身の研究をされておられることに敬服いたします。
- 会を重ねるごとに、行動に変化が起きていることが分かり、興味深く拝聴しました。ありがとうございました。

5. 全学共通の研究テーマ「学生支援の現状と課題に関する研究」

研究代表：棚崎由紀子 堀井順平 山崎 晃

1) 研究背景

近年、大学進学率の増加とともに多様性 (diversity) の重視を受けて、多面的支援の必要な学生が急増している。また障害学生支援については、法律の改定に伴い、大学等における合理的配慮の提供が義務化され、「教育の機会の保証」が支援の基盤となっている。

本学においても、休学・退学率増加の要因と推測されることから、日々変化している大学・短期大学生の実態を把握し、その状況に応じた学生支援のあり方を組織的に検討することは重要である。

そこで、対人援助研究センター主導のもと、令和5年度より大学・短期大学の共通テーマとして「学生支援」の研究を開始した。本研究は、学生の顕在・潜在化している支援ニーズを明らかにし、組織的支援体制の示唆を得ることを目的としている。

令和6年度には、大学生・短期大学生及び教職員を対象にWeb調査を実施し、対象者別に分析を進めているところである。

2) 研究方法

(1) 対象者：大学及び短期大学に在籍する全学生及び全教職員

(2) 調査方法：QRコードを用いたGoogle FormsによるWeb調査

・学生：2024年6月中旬～7月初旬に2回に分けて調査

・教職員：2024年6月中旬～7月初旬に調査

(3) 調査項目

【学生】1回目：Web調査

①学生の基本情報

学年、性別、部活・サークル、通学時間、居住状況、学生相談室の利用状況など

②身体・精神的健康観、生活満足度

現在の学生の健康状況、生活満足度について4件法で回答してもらった。

③大学生生活の現状

普段の大学生生活を想定し、学習面10項目、対人関係8項目、生活面4項目、経済面3項目、進路・将来3項目の計28項目について「(1)全くあてはまらない:1点」～「(4)非常によくあてはまる:4点」の4件法で回答してもらった。

④教員から受けている支援

本学の教職員からのサポート(学習面の支援11項目、対人関係の支援7項目、経済・生活面の支援13項目)について、「(1)全くあてはまらない」～「(4)非常によくあてはまる」の4件法で回答してもらった。

⑤「現在、大学生生活で困っていること」「教職員にしてもらいたい支援」の自由記述

2 回目：Web 調査

①援助要請スキル（本田・新川，2023）

援助要請スキルとは、自分一人で解決できないことを他者へ相談する際のスキルのことであり、12 項目で構成された尺度である。「1. ぜんぜんしない（1 点）」～「4. いつもそうする（4 点）」の 4 件法より回答してもらった。

②援助要請認知（本田・新川，2023）

援助要請認知とは、自分一人で解決できない状況下において他者への援助要請に対する認知のことであり、援助要請期待感 9 項目、援助要請抵抗感 9 項目の計 18 項目で構成された尺度である。援助要請期待感とは、周囲の人への相談のポジティブな効果の期待であり、援助要請抵抗感とは、ネガティブな効果への抵抗である。「1. 全然そう思わない（1 点）」～「4. とてもそう思う（4 点）」の 4 件法より回答してもらった。

【教職員】Web 調査

①教職員の基礎情報（年代、性別、所属学科、勤務年数、チューターの担当学年）

②学生に提供している支援（学習面、対人関係、経済面、生活面、進路:キャリア）

普段実施している学生支援を想定し、学習面・対人関係・経済面・生活面・進路の 5 側面計 11 項目について「(1) 全くあてはまらない:1 点」～「(4) 非常によくあてはまる:4 点」の 4 件法で回答してもらった。

③学生支援上の課題：困っていること

普段実施している学生支援において課題（困っていること）と想定された 15 項目について「(1) 全くあてはまらない:1 点」～「(4) 非常によくあてはまる:4 点」の 4 件法で回答してもらった。

④「学生支援上の課題：困っていること」「現在の学生支援の内容」の自由記述

4) 倫理的配慮

調査の実施にあたり、広島文化学園大学看護学部・看護学研究科の倫理審査委員会の承認を受けている（承認番号：2406）。

3) 研究の進捗状況

令和 5 年度より本研究が始動となり、令和 6 年度は倫理審査の承認を受け、大学生・短期大学生及び教職員を対象に Web 調査を実施した。学生調査では、大学及び短期大学に在籍している全学生 1573 名中 642 名（有効回答率 40.8%）から回答が得られた。教職員調査では、159 名（教員 101 名＋事務職 58 名）中 105 名（有効回答率 66.0%）から回答が得られた。

現在、学生及び教職員の全データの記述統計量を算出し、対象者別に分析を行っている状況である。なお、学生調査については、これまでの分析結果を中間報告として 1 月末に大学 HP 上の在学生の閲覧ページに発表した。また教職員には 3 月開催の FD 研修会で報告予定である。

6. 全学共通の研究テーマ「メタバースの基礎研究から応用への展望」

研究代表者：升本絢也、山中翔

(1) メタバースの活用について

メタバースはインターネット上に構築された仮想空間であり、人は自身の分身であるアバターを通して、その仮想空間を体験することである。現在、会議、旅、ショッピング、イベント（音楽ライブ等）、eスポーツ等、様々な形で利用されている。例えば、仮想空間上で再現された観光場所をめぐることで、自宅にいながら旅をすることも可能である。このようなメタバースは大学において活用することで様々な効果を得られると考えられる。大学への活用に繋げていくため、本年度はメタバースや関連用語の認知度、コミュニケーション手段としてもメタバース、大学（生）のメタバースの活用について調査するために、学生に対してアンケートを実施した。

(2) 調査方法

調査方法には google form によるアンケートを用い、対象は本学の人間健康学部1年生134名であった。まず、メタバースや関連用語の認知度を検討するために、1)「VR（バーチャルリアリティ）について知っていますか」、2)「AR（拡張現実）を知っていますか」、3)「メタバースを知っていますか」、4)「アバターという言葉を知っていますか」の4項目のアンケートを行った。4項目のアンケートについて学生には“知っている”、“知らない”、“聞いたことはあるが、意味は知らない”の3つから回答させた。

アバター（仮想空間上で出現する自身の分身となる存在）のように匿名性を持つコミュニケーションがどのように効果があるのかを検討するために、5)「匿名性あるコミュニケーション手段だと話しにくいことを話せるようになる」、6)「普段、匿名性のあるコミュニケーションをしている」、7)匿名性のあるコミュニケーションを行っている場を教えてください」の3項目のアンケートを行った。5)、6)について学生には“とてもそう思う”、“そう思う”、“どちらでもない”、“そう思わない”、“全くそう思わない”の5件法で回答させた。7)について学生には“SNS（インスタグラム、X、facebook等）”、“掲示板（4ch等）”、“ソーシャルゲーム”、“動画配信サイト（youtube、ニコニコ動画等）”、“メタバース系アプリ（VRチャット、clustar）”、“その他”の中から複数回答させた。

メタバースの活用状況および、大学で活用する可能性を検討するために、8)メタバースを活用したことはありますか（仮想空間でのコミュニケーション全般）、9)大学でメタバースを活用してほしい場面はありますかの2項目のアンケートを実施した。8)について学生には“ある”、“なし”で回答からさせた。9)については“授業での活用”、“オープンキャンパス”、“悩みの相談”、“実習等の練習”、“その他”から回

答させた。

その結果、1)「VR (バーチャルリアリティ) について知っていますか」の項目では”知っている”の回答が50%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が28.4%、”知らない”の回答が21.6%であった。

2) 「AR (拡張現実) を知っていますか」の項目では”知っている”の回答が18.7%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が26.1%、”知らない”の回答が55.2%であった。

3) 「メタバースを知っていますか」の項目では”知っている”の回答が13.4%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が22.4%、”知らない”の回答が64.2%であった。

4) 「アバターという言葉をしっている」の項目では”知っている”の回答が46.3%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が32.1%、”知らない”の回答が21.6%であった。VRやアバターという言葉は半数以上の学生が聞いたことがあり、5割程度の学生が意味を理解しており、ある程度学生でも触れている言葉であるだろう。それに対して、近年では様々な場面で聞くようになったメタバースとそれに関連したアバターという用語であるが、学生の認知度はとても低く、メタバースの導入の際には学生にメタバースを理解させる必要があるだろう。また、メタバース自体利用しているにも関わらずそれをメタバースとして認識せず利用している場合も考えられる。

5) 「匿名性あるコミュニケーション手段だと話しにくいことを話せるようになる」の項目では”とてもそう思う”の回答が27.6%、”そう思う”の回答が43.3%、”どちらでもない”の回答が6.7%、”そう思わない”の回答が3.7%、”全くそう思わない”の回答が21.6%であった。

6) 「普段、匿名性のあるコミュニケーションをしている」の項目では”とてもそう思う”の回答が14.2%、”そう思う”の回答が17.9%、”どちらでもない”の回答が19.4%、”そう思わない”の回答が19.4%、”全くそう思わない”の回答が29.1%であった。

7) 「匿名性のあるコミュニケーションを行っている場を教えてください」の項目(複数回答可能)では”SNS (インスタグラム、X、facebook等)”の回答が78.4%、”動画配信サイト (youtube、ニコニコ動画等)”の回答が17.9%、”ソーシャルゲーム”の回答が13.4%、”メタバース系アプリ (VRチャット、clustar) の回答が4.5%、”その他”の回答が11.2%であった。7割程度(とてもそう思う、そう思うを含む)の学生が匿名性のあるコミュニケーションだと普段より話しやすいと感じているにも関わらず、実際には約3割程度しか匿名性のあるコミュニケーションができていないのが実際であった。活用している人たちはSNSにより匿名性のあるコミュニケーションをしているが、その他の場はあまり活用されていないようだ。

8) メタバースを活用したことはありますか(仮想空間でのコミュニケーション全般)の項目では”ある”の回答が13.4%、”ない”の回答が86.6%であった。9) 「大学でメタ

「メタバースを活用してほしい場面はありますか」の項目では「授業での活用」の回答が50.7%、「オープンキャンパス」の回答が11.9%、「悩みの相談」の回答が15.7%、「実習等の練習」の回答が7.5%、「その他」の回答が14.2%であった。

現状、全国の大学では、授業、オープンキャンパス、キャリア相談、実習、不登校支援、国際交流等の実施例がある。本調査による学生の視点から見るとメタバースの認知度も低く、活用するには利点を理解させる必要があるかもしれない。しかし、アバターを介したコミュニケーション等は匿名性のあるコミュニケーションで話しやすくなるということを考慮すれば、メタバースによる悩みやキャリア相談等有用になるだろう。一方、授業や実習など、既に多用されている活動における効果の検証も行う必要があると考えられ、今後、効果を検証していきたい。

7. 看護総合研究センター(阿賀キャンパス)の活動報告

看護総合研究センター運営委員

棚崎由紀子 岩本由美 波多江崇 進藤美樹 岡田真亮

実行委員

前信由美 田村和恵 岡田京子 佐々木由紀 藤本和恵 高橋登志枝
武智朋子 塩田愛子 岸本香代 深井美穂 菅野香代 古屋敷智恵美
山内京子

(1) 看護総合研究センターの活動について

看護総合研究センターは、呉・阿賀キャンパスに設置されている看護学部看護学科、大学院看護学研究科の学術研究活動の奨励・助成・支援を行うとともに地域社会の学術研究発展に寄与した様々な事業を実践している機関である。

その主な活動として、呉市委託「きてくれサロン事業」である『きんさいカフェ呉(認知症予防カフェ)』の開催、あがりんさい便り(健康情報のニュースレター)の発刊、地域住民に対する健康教室の講師派遣、センター活動報告として年報発刊、その他対人援助研究センターと連携しながら教員の研究支援等を行っている。

(2) 呉市きてくれサロン事業「きんさいカフェ呉」

呉市きてくれサロン事業とは、家に閉じこもりがちな高齢者に対し、介護予防に対する初期的な取組や交流の場を提供するとともに、その普及啓発を図ることにより、要介護状態等になることの予防または要介護状態等の軽減もしくは悪化の防止を目的とした活動である。体操や歌、レクリエーション等のプログラムを実施し、高齢者の身体機能の向上及び脳の活性化を図るとともに、高齢者同士の交流の場を提供している。

看護学部がこの事業に参加している意義として、看護専門職を目指して様々な医療、看護、保健分野を学ぶ学生と地域住民との世代を超えた交流を通して、看護の対象である高齢者を理解し、コミュニケーション等の対人援助技術の向上とともに、地域包括ケアシステムの一員としての役割も担っている。また、カフェに参加している高齢者に継続して行っている生活満足度やうつ傾向等の多面的な基礎調査を、研究的視点からカフェの介護予防ならびに健康支援に対する効果の検証につなげたいと考えている。

今年度、呉市きてくれサロン事業のリニューアルに伴い「認知症予防カフェ」として再スタートし、年5回のきんさいカフェ呉を開催した。詳細は下記の通りである。

・第1回目:5/17

老年看護学実習Ⅱ:4年(23名)、高齢者看護領域教員等の5名とともに、地域住民20名が参加。参加者の若かりし時代(昭和)の懐メロをハワイ・コールズさんによる歌とウクレレの演奏

で楽しんだ。また国立長寿医療研究センターが開発した運動と認知課題(計算、しりとりなど)を組み合わせたコグニサイズを取り入れた。

・第2回目:8/9

「健康づくり:暑い夏を乗り切ろう〜!」をテーマに看護学部認知症看護強化コース(4年)5名が企画したカフェに高齢者看護学実習Ⅰ:3年(15名)、成人看護学領域教員等7名とともに地域住民17名が参加。吹奏楽サークルの学生のピアノとフルート、篠笛の演奏、健康体操、風鈴づくりを行った。

・第3回:11/17

成人看護学援助論:2年(60名)、成人看護学領域教員等7名とともに地域住民20名が参加。年に1度の健康測定(体温、血圧、骨密度、体脂肪、筋肉量、体内水分量などの体組成、認知機能、歩行機能:Timed Up & Go Test:TUG)を実施した。待ち時間を活かして口腔ケア、あいうべ体操の健康教室も行った。

・第4回:12/20

高齢者看護援助論Ⅱ:2年(40名)が企画したカフェに呉市立呉高校3年(10名)、高齢者看護領域教員等5名とともに地域住民27名が参加。サンタクロース等のクリスマス飾りを色ガミで作り、老人クラブのハンドベル演奏、脳トレ、介護予防体操などを行った。

・第5回:1/31

高齢者看護援助論Ⅱ:2年(44名)が企画したカフェに高齢者看護領域教員等5名、ボランティア4名に地域住民40名が参加。ゲームや体操、琴とピアノの演奏、豆まきを行った。



2)あがりんさい便り(ニュースレター)の発刊

きんさいカフェ呉の参加者を中心に最新の健康トピックスや運動、脳トレ、レシピ、大学生の近況報告等の発信を目的としたニュースレター「あがりんさい便り」を年4回発行(7月末、11月、1月、3月を予定)している。

3) 看護総合研究センター年報

看護総合研究センター事業および社会貢献・地域連携推進事業、国際交流、研究科報の活動報告として前年度の年報を毎年、発刊している。今年度(2024年9月)からは大学HPに看護総合研究センターのページを作成し、年報の掲載を開始した。

4) 大学周辺の住民に対する健康教室の講師派遣

大学周辺の阿賀地区を中心に学生ボランティア、健康教室の講師の依頼が入る。今年度は、下記の5件に対応した。

- ・7/6 阿賀西延崎老人クラブ「プラチナクラブ」の健康づくり教室:七夕会:1、4年生のボランティア学生4名、教員1名が参加:血圧測定、脳トレ、七夕ゲームなど(参加者約16名)
- ・7/7 阿賀町民健康づくり大会 2024「シニア世代の疲れにくい身体づくりのヒント」参加者約150名(棚崎)
- ・10/3 呉市阿賀東新開の健康教室「お口の健康を考えよう～高齢者の口腔ケア:口から食事ができる工夫～」参加者15名(棚崎)
- ・12/1 公益社団法人広島市身体障害者福祉団体連合会文化講演会「身体の変化と元気で健康な生活を送るヒント:高齢者の車の運転について」参加者約70名(棚崎)
- ・2/15 呉市阿賀原親和クラブの健康教室「ヒートショックを防ごう、介護予防体操」(棚崎)14名

8. 子ども・子育て支援研究センター(長束キャンパス)の活動報告

1) 子ども・子育て支援研究センター運営会議の開催

第1回会議は令和6年4月24日(水)「令和6年度の活動と役割について」、第2回会議は令和6年6月5日(水)「リレー講座の日程調整並びにぶんぶん活用、リーフレットのリニューアルについて」、第3回会議は令和6年9月11日(水)「リレー講座の報告、講演会について」、第4回会議は令和6年10月30日(水)「年報の作成とホームページのリニューアルについて」、第5回会議は「講演会の役割分担と進行について」、合計5回の運営会議を開催した。

2) ぶんぶんひろばの活動

(1) ぶんぶんひろばのねらい

地域の親子が集い、それぞれが自由に楽しく遊ぶことができる場を提供する。開催日は、授業が開催されている期間の火曜日と金曜日を定期開催日とし、午前の部・午後の部それぞれ親子20組の予約制で開催した。保育士2名が常駐するが、指導等を行わず、人と人のつながりを感じて自ら行動できる空間を目指し、ゆったりとした時間の流れのなかで子育てのできるオープンスペースを実施した。子育てに役立つ情報を用意し、子育て相談に応じるなど地域貢献の場となるよう活動を行った。

また、学生が学園内で親子の姿を見ることにより、子どもの発達や子育ての状況を学習することができ、その支援の方法を考察する機会を得ると共に、実際に手助けを体験することもできるよう、授業の中にセンターでの実習を取り入れ座学で学んだ内容を深めた。その際、臨時開催として、火曜日・金曜日以外でも授業の取り組みとして開催できることとした。センターのハード面、ソフト面、実際の親子との交流など、多くのことを体験し、学習の効果をあげることができた。

(2) 活動内容

ひろばスタッフである保育士2名が見守り、週に2回の定期開催とそれ以外の曜日に開催する臨時開催日がある。いずれもオープンスペースとして開催されており、10:30~12:30、13:00~15:00の2部制、かつ予約制にて行った。季節の遊びや親子で楽しめる簡単な製作などを展示し、情報を提供する。ただし、研究センターとしての役割を果たすために、調査研究へのご協力を依頼することがあることや託児施設ではないことをご理解いただけるよう、施設利用の際には趣旨の徹底を図った。

(3) 学生のかかわり

子育て支援や、心理学、教育学、保育士資格・幼稚園教諭免許等の関連科目では、実際に子どもの発達や子育て中の親子の姿を学習することにより、学習内容の理解を深めることができた。学生がセンターを利用する際には、誓約書により学生の守秘義務を確認・徹底し、誓約した後、センターでの実習を行う。研究センターのハード面、ソフト面を学習し、今後ますます必要と

なる、子育て支援の実際例を体験する。

令和6年度も、保育学科の1年生は「セミナー1」の授業の一環として6月に「赤ちゃんふれあい体験」を行った。11月に行われる初めての教育実習までに乳幼児やその保護者と触れ合う機会がない1年生にとって、ぶんぶんひろばに遊びに来られている赤ちゃんとの触れ合い、お母さん方との交わりは、貴重な実践的学びの体験となった。このように学科によっては、授業での学びの成果を披露したり、子どもたちと交流したりしながら更に学びを深めるなど、理論と実践の往還的な学びが可能となり、学科の特性に合わせた多様な活動が行われた。ぶんぶんひろばの開催時に限らず、非常勤講師を含め全教員へ授業での施設活用を促し、学生の学びや経験を担保できるように試みた。

(4) 令和6年度のぶんぶんひろば利用実績

週に2回(火曜日・金曜日)の定期的な開催とそれ以外の曜日に開催する臨時開催を行い、午前・午後ともに20組に限定し予約制にて行った。令和6年度より、ホームページ「ぶんぶんひろば」よりGoogleカレンダーやGoogleフォームを活用して申し込みができるようにした。また、ひろしま夢財団のポータルサイト「イクちゃんねっと」とも連携を行い、広く地域の方々に利用していただけるように広報手段を広げた。表1は定期開催、表2は臨時開催の利用者数をまとめた。

表1 令和6年度 ぶんぶんひろば利用者数 (定期開催)

月	実施回数	子ども人数	保護者人数	人数合計	組数
4月	6	44	35	79	35
5月	8	66	52	118	52
6月	8	56	48	104	47
7月	8	132	104	236	102
8月	3	43	32	75	32
9月	2	23	20	43	20
10月	9	101	84	185	84
11月	8	91	80	171	79
12月	6	79	69	148	68
1月	6	67	61	128	60
2月	5	49	42	91	41
合計	69	751	627	1378	620

表2 令和6年度 ぶんぶんひろば利用者数 (臨時開催)

月	実施回数	子ども人数	保護者人数	人数合計	組数
4月	0	0	0	0	0
5月	1	5	4	9	4
6月	4	33	29	62	29
7月	2	19	17	36	16
8月	2	23	17	40	17
9月	0	0	0	0	0
10月	0	0	0	0	0
11月	2	23	20	43	20
12月	3	32	30	62	29
1月	2	17	17	34	17
2月	3	20	14	34	14
合計	19	172	148	320	146

また、ぶんぶんひろばを授業で活用した回数と利用した総会数は、32回であった。利用した学科の内訳は、保育学科5回、食物栄養学科2回、子供学科15回、音楽学科10回であった。32回のうち、ぶんぶんひろば参加者との交流が18回、施設(環境)のみの活用が14回であった。以下、ぶんぶんひろば活用による成果と課題について示す。

<成果>

- ・学生は、乳幼児や保護者の方との触れ合いの機会をもつことで、発達のことや子育て支援に関すること、保育者の役割等を実感できる学びとなった。更に、日々の授業のモチベーションが高まった。

- ・ぶんぶんひろば参加者との音楽遊びを通して、学生は音楽が子どもの成長や親子のかかわりの有効なツールになることを学んだ。また、子どもが好む歌やリズムなどを知ること、演奏に広がりがあった。

- ・ぶんぶんひろばの参加者を対象に学生が食

育ミニ講座を開催したことで、学生の取り組みへの意欲が向上し、日頃の授業とは異なるリアルな反応や発言を見聞きできる貴重な体験となった。

- ・子どもの立場になった利点や改善点について考える機会をもった。子どもの安全を確保するための保育室の工夫に気づくことができ、実習への契機となった。
- ・保護者と子どもがリアルに過ごす空間を体験することで、保護者のストレスやその対処法など聞き取ることができ、子育てや保育への興味を深めていた。

<課題>

- ・学生の授業へのモチベーションを高めるためには、ぶんぶんひろばでの体験が定期的に行うことが望ましい。
- ・ぶんぶんひろばの実施曜日が限られている(火・金)ため、当該授業とは異なる時間帯で実施せざるを得なかった。次年度以降も実施したいが、時間割とぶんぶん実施曜日の調整が難しい。

3) 公開リレー講座の開催

2024 年度公開リレー講座は子ども・子育て支援研究センターの運営委員でもある各教員の専門分野に関する内容で、ぶんぶんひろばに参加される親子を対象に、令和 6 年 7 月～令和 7 年3月の期間に各教員が 1 回ずつ、リレー式に講座を行うものである。担当者は高橋佑子講師(コミュニティ生活学科)、満留由紀子准教授(音楽学科)、江坂美佐子准教授(食物栄養学科)、金子忍准教授(保育学科)、合原晶子教授(子ども学科)、富田雅子教授(保育学科)である。

① 第 1 回目:「子育てママの簡単お洋服選び」7 月 12 日(金)開催

育児で忙しいお母さんに、元気で健康的に見える「似合う色」の洋服についての話を行う。正式なパーソナルカラー診断のデモンストレーションを行ったり、参加者一人一人にパーソナルカラーを伝えるためセルフチェックシートや手の色で簡単診断を行う。似合いやすい色やファッションの方向性が分かるようにアドバイスをを行った。自分に似合う色(パーソナルカラー)を知ることによって健康的な印象づくりができることを体感し、忙しいお母さんの節約&時短のおしゃれの楽しみ方を学ぶことができた。参加人数は、子ども 19 名、大人 17

② 第 2 回目:「健やかな体作りのための食事」10 月 18 日(金)開催

お母さんが元気に子育てするための食事についての話と簡単なワーク、お子さんの食事についての個別相談を行った。ひろばの利用者が健やかな毎日を過ごせるよう情報提供と個別相談を引き続き実施する

③ 第4回目:「音で遊ぼう」12月20日開催

親子で音遊びや楽器を使用した活動を提供する。また、音楽と子どもの発達についても話をを行い、言葉中心の遊びから、音や楽器などを使ってコミュニケーションを図りながら親子またはそこに参加する参加者と交流を深める。音や音遊びをすることで子どもの自己表現の場となることから、保護者が子どもとの音楽体験を通して交流を深めることを目的として実施した。

④ 第5回目:「きょうだいが生まれた」2月19日～3月19日毎週水曜日に開催 全5回

ひろしまこども夢財団と共催で行った。第2子を育てている母親への講座で、第2子の月齢が2か月～7か月とした。2人目を育てることの困難や葛藤、母親として一人の女性として悩みやストレスを出し合い、講座の中で自分なりの解決法を見つけていくことを目的とする。第1子は学内で学生ボランティアと保育士が託児を行っているため、第2子と1対1で向き合うことが可能となり落ち着いた空間で講座を受けることができる。6組の親子が参加して2名の託児申し込みがあった。延べ11名の保育学科の学生が保育士とともに2時間の託児にかかわり、託児時間内の子供の様子について保護者への報告も行った。

4)ミュージックチャイルド

令和6年度は、対象児1名に対して音楽療法を学ぶ学生2名にドラムを教えることを実施してもらった、これは保護者が「障害があっても、一生音楽を楽しめるように」、また「ドラムの演奏で保護者と音楽コラボしたい」という希望を実現するためにこの内容で行った。今年度の後期には、新規の対象児が1名増えたので、本学を卒業した音楽療法士に依頼してセッションを実施する(追加の1名は令和7年1月より実施予定)。今年度の対象児は合計2名。発達の援助を行った。今年度の開催日は、4月23日(火)、5月14日(火)、6月25日(火)、7月9日(火)、7月23日(火)、8月30日(火)の合計6回実施した。

5)子どものための音楽会

音楽学科2年生の「演奏活動I・II」履修生によるコンサート。令和6年度は、5月16日(木)、6月6日(木)、6月27日(木)、7月18日(木)、11月7日(木)、11月21日(木)、12月5日(木)、12月19日(木)、1月16日(木)、1月23日(木)合計10回コンサートを開催した。

6)ぶんぶんクラブ

今年度は4月にサークル加入者が16名でスタートした。前期にはぶんぶんひろばへの保育ボランティアとしての参加は24回、活動した学生数は延べ71名となり、学生にとっても、未就園児親子と関わりをもつ貴重な体験ができた。この他、地域や広島市・呉市等からのボランティア応募にも数名が参加した。

7)子ども・子育て支援研究センター年報第14号発行

令和5年9月初旬に原稿募集を広報し、10月原稿締切とした。研究論文2本と、研究ノ

ート1本、活動報告それぞれのまとめにより構成された。令和7年3月に印刷を終え、必要箇所に配布された。

8) 講演会の開催

広島文化学園子ども・子育て支援研究センターを主催として講演会を行った。令和6度は、長束キャンパスを会場として令和7年2月22日に対面で行った。テーマは「発達支援の基礎と実践－対人援助における究理実践－」とし、広島文化学園教育学研究科長である山崎晃教授が講演を行い、その後、広島文化学園大学子ども学科の八島美菜子教授、同じく、子ども学科の田中克人准教授が発達支援に関する話題提供を行った。学内外からの56名の加があり、活発な意見交換が行われ盛況のうちに会を終えることができた。

9) 発達障害支援事業

発達障害のある子どもとその保護者の支援のための活動を、スヌーズレンルームの活も踏まえて検討した。併せて、令和6年度は、スヌーズレンルームそのものを授業で活用するように教員に促したものの、数回の使用にとどまった。今後の発達障害支援事業を新たに構築していくための検討と準備の期間にあてた。その一環として、保護者が相談しやすい環境となるよう配慮して「発達障害相談・支援」を「子育て相談・支援」と改め、広く子育ての相談・支援を行う中で必要に応じて発達障害の相談や支援を行えるような環境とした。

ぶんぶんひろば利用中の保護者からの、発達や子育てに関する個別の相談が令和6年4月から10月末までに23件あった。R6年度は相談内容を記録し分析を行った。発達障害に関する相談については、言語的課題や問題行動についての相談があった。園に所属していない未満児を子育てする保護者の相談窓口として機能しており、相談出来たことで安心が得られている状況が確認できている。

10) パンフレットの改定

活動内容に合わせてパンフレットの記載文言を「発達障害相談・支援」から「子育て相談・支援」と改定し、地域の施設への配布のために増刷を行った。

11) 広報活動

ホームページのリニューアルを行った。Google フォームや Google カレンダーを活用して、センターの活動を広く周知するとともに利用者の拡大や利用予約の合理化を試みた。また、リレー講座の報告を担当教員の学科からの発信としてホームページの NEWS に掲載することとし、学科とセンターが協働して活動を行っていることのアピールを行った。

10. スポーツ健康福祉研究センター(坂キャンパス)の活動報告

1) スポーツ実施の現状

スポーツおよび運動が人間の心身の健康に及ぼすポジティブな影響は多く、生涯にわたってそれらの活動に参加することは生活の QOL を向上させるために非常に重要であると考えられる。特に障害者や高齢者の運動参加を増やすことが地域に住む人生活の質向上のために重要な課題であるだろう。そのような問題に対して、スポーツ健康福祉研究センターでは性別や年齢、体力、スポーツ経験の有無に関わらず誰でも気軽に参加して楽しむことができるよう、ルールや用具を工夫し適合させた「アダプテッド・スポーツ」をテーマとして掲げ、いくつかの活動に取り組んでいる。またそれらの活動の中でどのように「アダプテッド・スポーツ」のプログラムがより多くの人々の QOL の増加につながるのかの検証を繰り返している。さらに、「アダプテッド・スポーツ」のプログラムを実践するサポーターを育成し、地域でのプログラムの定着を図る。

本センターの活動として、HBG 重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」、ブラインドサッカー教室、HBG テニス教室などがあげられるが、本年度は相川准教授を中心とした活動であるブラインドサッカー体験教室の活動について紹介する。

2) ブラインドサッカー体験教室

昨年度、相川ら⁽¹⁾の先行研究では、小学生がパラリンピックの種目であるブラインドサッカー選手とともにブラインドサッカーを体育の授業内で体験することで、視覚障害者観をどのように変容させるのかを調査・研究している。この研究では、小学校 4 年生(17 名)及び 6 年生(44 名)の 61 名を対象に学年別に 2 コマ 6(45 分×2 の 90 分)の体験型授業を実施し、その前後で視覚障害者への意識に関する質問紙調査を実施した。その結果、障害者と接触することの抵抗感の変化と障害者との今後の関わりについては、授業前後で有意な差は出ていなかったが、障害児者イメージでは、質問項目 11 項目中 8 項目で有意な差が生まれていた。授業後の感想では、「楽しかった」という回答が最も多く、次いで、「難しかった」、「怖かった」が多かった。視覚障害者理解教育においても他の障害者理解研究の先行研究と同様に、小学生年代に障害者当事者とともにブラインドサッカーの体験型授業を行うことで、障害者の関りやイメージは肯定的に変化することが示唆された。

更に、中学生がブラインドサッカー体験教室を行った際の視覚障害者観の変化を検討するため、本年度は、中学生が体育の授業で全盲のサッカー選手とブラインドサッカー体験教室を実施した。対象者は広島県 A 郡 S 町の中学校 3 年生(93 名)であった。調査は中学生に対してブラインドサッカーの体験型授業を実施した(図1、図2)。その前後で視覚障害者への意識に関する質問紙調査を実施し、授業後のみ体験してみても感想についても調査した。ブラインドサッカー体験授業は、1 コマ(50 分間)で、授業内容は表の通りである。授業は、JBFA のファシリテーター1名と選手1名によって実施された。回答者の性別は、女子 40 名(43%)、男子 53 名(57%)であり、障害者との接触経験がある者は 11 名(12%)、ない者は 82 名(88%)であった。参加者全員が視覚障害者とスポーツ体験をしたことも、ブラインドサッカーを体験したこともなかった。

分析の結果、「かわいそう」、「暗い感じ」、「生活するのが難しい」、「ひとりでは何もできない」、

「スポーツするのはあぶない」、「一緒にスポーツは困難」の項目において有意な差が生じていた。その他の 5 項目においては、前後の差異は有意でなかった。したがって、障害者イメージでは、11 項目中 6 項目で統計的に有意な肯定的な変化があった。

相川らの先行研究⁴⁾は小学生に対して、ブラインドサッカーの体験授業を行い、障害児者イメージに関する 11 項目中 8 項目で肯定的に変化することを示した。先行研究と比較すると、「かわいそう」、「暗い感じ」、「生活するのが難しい」、「^⑩スポーツするのはあぶない」、「一緒にスポーツは困難」の 5 項目で同様の結果が出た。このことから、中学生においてもブラインドサッカー選手とブラインドサッカーの体験をすることは、障害者に対する印象や障害者がスポーツをすることに対する危なさや困難さを感じなくなっていると考えられる。

今後は、アダプテッド・スポーツ体験型授業により、肯定的に変化した視覚障害者観が、実施後どのように変化していくのかを調査、検討する必要があると考えられる。また、視覚障害者との体験型授業を複数回行った際の視覚障害者観の変化や、視覚障害以外の障害を持った人との体験型授業などを組み合わせることによる障害者観の変化についても調査・研究していく必要があると考えられる。

引用文献

- (1) 相川貴裕・加地信幸・河野喬・升本絢也・東川安雄 (2022)「ブラインドサッカー体験が小学生の視覚障害者観に与える影響について」『人間健康学研究』Vol. 5, 33 -40



図 1 挨拶・体験内容説明



図 2 生徒同士でのパスの体験

11. おわりに

対人援助研究センターは看護総合研究センター、子ども・子育て支援研究センター、人間健康福祉研究センターの協力の下、「対人援助」をキーワードとして、研究活動・支援等を行っている。

3センターには、それぞれの研究センターとしての役割を果たすと同時に、広島文化学園全体の「対人援助」としての統一的、一体的活動が求められている。その上で、令和6年度は、対人援助研究センターを核として3センターを一つの組織としてどのように活動すればよいかを模索しながら、学園の構成員である学生、教職員の「対人援助」に関する認識を深め、自らに関わりがあるという意識・行動の基礎となる心構えを醸成している段階である。具体的には、全学共通の研究テーマとして「学生支援の現状と課題」と「メタバースに関する学生の理解」を設定し、研究を進めてきた。この2つのテーマは現在、個別に行われているが、将来的には一つに融合できる可能性を含むものである。例えば、支援の必要な学生の支援方法の一つとしてメタバースを使うこともできであろうし、実験・実習棟の授業の困難さを、メタバースを使って克服できる可能性もあろう。今後の発展を期待したい。

ここに「HBG 対人援助研究センター」の活動を知っていただくために「対人援助研究センター年報」第2号を作成した。関係各位の皆様にご覧いただき、忌憚のないご指導・ご鞭撻を承りたい。

対人援助研究センター長
山崎 晃

編集後記

対人援助研究センター年報の発行から2巻目となります。令和元年度に修了したブランディング事業以降に、定着した活動、新たに行われる活動も増えてきました。対人援助研究センター、各センター、それに関わる教職員の方々の努力により本学が「対人援助」が活発になっていくと信じております。HBG 対人援助研究センターとしても各センターや対人援助に係る教職員の行う「対人援助」の取り組みを促進できるよう努力していければと考えております。

副センター長：升本 絢也

企画・編集

広島文化学園 HBG 対人援助研究センター

本部長 坂越正樹

センター長 山崎晃

副センター長 棚崎由紀子

副センター長 富田雅子

副センター長 升本絢也

室長 白砂千登勢

対人援助研究センター年報

令和6年度 第2巻

発行年月日 令和6年3月20日

発行 広島文化学園 HBG 対人援助研究センター

編集者代表 対人援助研究センター長 山崎晃

住所 広島市安佐南区長東西三丁目5番1号

電話 082-239-5171